

事例名称： 渋川市 石坂 英雄

榛名山麓で多角的な技術と低コスト生産方式を取り入れた肉用牛一貫経営

～後継者（娘）とともに考える「ゆとり」と「低コスト生産」への挑戦～

《地方審査委員会に評価されたポイント》

1．事例の特徴

本事例の特徴は、肉用牛一貫経営において、繁殖牛のきめ細かな管理と受精卵移植技術の導入、さらには肥育素牛生産のコスト低減等、多角的に技術とシステムを取り入れた事例である。

取り組んだ内容は、受精卵移植技術を取り入れた子牛生産として、集約管理による繁殖成績の向上（分娩間隔11.7ヶ月）、優良系統牛の選抜と自家採卵の効率利用、

F1繁殖牛を活用した低コスト子牛生産である。また、積極的に自給飼料生産を行い、しかも効率的な生産方式を取り入れる一方、食品残さの利用で飼料費節減を図っている。さらに、今日畜産の課題となっている堆肥の処理・利用ではシンプル且つ低コスト施設で良質堆肥を調製、販売し、15年以上も継続されている。

一方、経営面では「ゆとりある経営」を基本とし、定期的に雇用して、ゆとりを創出している。したがって、家族労働を中心として無理な規模拡大を行わず、コストの追求を試みた安定的な経営が特徴である。

なお、規模拡大は後継者が経営に専従できた時点で繁殖牛100頭を目指している。

2．審査委員会における評価

肉用牛一貫経営は比較的土地基盤が希薄な経営が多いが、当農場は積極的に自給飼料生産を行っていることは高く評価できる。また、F1を借り腹牛として活用することは子牛生産のコスト低減、現在挑戦している双子生産などは将来の一貫経営の基礎となるシステムで、委員会として技術の確立を望んでいる。

さらに、堆肥調製利用では、生産量の70%を販売し、15年以上継続されていることは他の模範となる事例である。

以上、審査委員会では取り組み成果を高く評価している。

経営実績（経営収支・損益等）を裏付ける取り組み内容等

1．受精卵移植技術を駆使した牛群改良

後継者となる娘（24才）は大学卒業後、県畜産試験場へ研究生として2年間受精卵移植技術の研修を受け、現在はさらに技術の研鑽、繁殖農家とのネットワーク拡大のため畜産試験場嘱託職員として勤務する傍ら、経営の改良部門に参画している。その主な取り組みは次の通りである。

（1）繁殖管理に必要な知識の習得から、飼養技術、発情発見、精液選抜、人工授精、自家採卵と採卵間隔など、一連の技術体系で効率的に優秀牛の確保を行っている。

（2）自家採卵牛5頭を選抜、後継者が人工授精師、受精卵移植師を取得し、獣医師のもと採卵、移植ができ、低コストで子牛生産を行っている。

また、自家採卵後、受精卵のクラス分けや保存技術があり、計画的な改良・繁殖を行っている。

（3）繁殖農家との交流から、県下の和牛の情報を拡大し、効果的な改良に役立てている。

（4）受精卵利用による双子生産への挑戦として、F1繁殖牛は体が大きく、受精卵の2卵活用を手がけ、本年10月出産予定である。

（5）母牛の償却費負担の軽減から、繁殖和牛以外にF1繁殖牛20頭を飼育し、受精卵移植による低コスト子牛生産を導入している。

2．積極的な自給飼料生産と食品残差の活用による低コスト生産

（1）飼料基盤の拡大

近隣の遊休農地、自作地、共同採草地など5.5ヘクタールに永年牧草を栽培、ロールベール・ラップ方式による低水分サイレージを生産して、繁殖牛の基礎飼料とし、健康管理に努めている。

生産に機械利用組合を組織して、機械経費が経営に圧迫されないように工夫している。

（2）食品残さの活用

食品残さ（うどん工場からの残さ物、オカラ）が無料で得られるので、積極的に利用している。

3．堆肥の調製と販売

牛糞堆肥は完熟調製を行い、袋詰め年間6,000袋を農協、種苗会社に販売している。自家生産の約70%を販売し、約15年以上続いている。

4．超早期離乳による分娩間隔の短縮

子牛は分娩後5日で離乳し、人工乳で飼育することによって、畜舎の効率利用、子牛の下痢防止、分娩間隔の短縮など、繁殖成績の向上と子牛の発育成績向上に貢献している。

5. ゆとりある経営

夏山冬里方式による繁殖牛の飼養管理の軽減、定期的な雇用によって「ゆとりある経営」を実施している。

6. 研究機関との連携

E T技術と飼養管理を研修した県畜産試験場との連携によって、最新技術の習得など、経営内に反映している。

活動画像

	
放牧地	牛舎内
	
開放式堆肥化乾燥施設	袋入りたい肥